

朝七時、雲村始発のこのオレンジバスは、別名病院バスといわれている。四十分離れた町立病院に通う婆さんでいつもいっぱいだ。爺さんはめったに乗ってこない。爺さんは早くに死んでしまいうらしい。私は、毎日このバスで整形外科に通う。半年前に右肘を骨折したりハビリだ。

雲村は平家落人伝説のある村で、二十年前までは蜜柑を出荷していた。白い花が山一面に咲き、オレンジ色の甘い蜜柑が輝いていた。日本人があまり蜜柑を食べなくなったのと、若い者が便利さと仕事を求めて山を降りたのが重なり、今では雲村は二十所帯ばかりになっている。蜜柑の名残りはバスの名前に残っているだけだ。

バスが急カーブを曲がった。婆さん達が全員右側に傾いた。空気が動いた。早朝草刈をしてきたソノさんからは草の青々とした香が立ちのぼる。友さんからは、腰に貼ったシップがツンと匂う。

運転手が窓を開けた。町の金属っぽい臭いが入ってきた。

町立病院前に着いた。

「あら、パス入れてしもうた」

タヨさんが叫んだ。料金箱に百円のお金と一緒に老人パスを入れてしまったのだ。パスは運転手に見せるだけでいいのに。

「百円とパスは同じ手に持たんほうがいい。右手に百円、左手にパス。そうすりゃパスを料金箱に入れることはない。横着せんぞ」

運転手が大声で怒鳴った。婆さん達は、すぐに右手に百円玉、左手にパスを握り直した。

「皆、もう今日はパスは見せんでもいい。老人パスを持ちよる年だというのは見たらわかる」。運転手は笑った。

婆さん達は笑わなかった。病院に一刻も早く着いて番号札を取りたいのだ。長く待つのは疲れるし、帰りのオレンジバスに間に合わなくなる。遅くなると夕方の仕事が忙しく押し寄せてくる。ひもじいと鶏が鳴く。猫も鳴く。我が家には山羊がいる。山の村は早く暮れる。

「ユキさんよ、今日は何科か」

「産科よ。ひ孫が産まれた」。目を細めた。

先頭の婆さんから順に町立病院に吸い込まれていく。最後に私が早足で行く。